

## くらしと協同をたずねて

# 賀川豊彦を次世代に伝える —神戸市の小学校副読本への掲載について—

浮網 佳苗 (日本学術振興会 特別研究員 PD)

### はじめに

協同組合に関わっている人々であれば、賀川豊彦(1888-1960年)の名を目にしたことはあるだろう。神戸を拠点に、生協運動をはじめとする慈善活動に従事し、日本の社会福祉実践の基礎を築いた人物である。しかし、賀川がどのような人物で、いかなる人生を歩み、どのような活動に従事したのかについて、詳細に知っているという人は少ないのではないだろうか。現在、日常のなかで賀川豊彦の人物像や活動内容に触れることのできる機会が決して多くはないからだ。

しかし、この状況が変わりつつある。2020年以降、神戸市の小学校の社会科副読本に賀川豊彦が登場するようになったのだ。これは、早くから賀川の存在を知り、協同組合や相互扶助の考えを当たり前のものとするにつながる、極めて画期的な出来事なのではないかと思われる。

そこで、副読本掲載の経緯や反響などを知るために神戸市にある賀川記念館を訪ねた。記念館は三宮の中心部からほど近い場所に位置する。このたびお話を伺ったのは、西義人氏、田中重至氏、小野歩氏の3名である。

### 賀川記念館の特色

本題に入る前に、まず今回訪問した賀川記念館について簡単に紹介したい。賀川豊彦について学ぶことのできる施設は、賀川記念館を含めて全国に5か所存在するが、この記念館が他の施設と大きく異なる点は、社会福祉法人として、社会福祉事業に取り組んでいることである。記念館の入る建物は4階のフロアからなり、1階から3階部分までが、認定こども園や児童発達支援事業といった子どもに関わる福祉事業の施設である。4階部分に賀川豊彦に関するミュージアムがあり、地域福祉としてのコミュニティカフェである「天国屋カフェ」が併設されている。さらに、館内では外国にルーツをもつ子どもと大人のための学習支援教室も定期的に開かれている。



賀川記念館の外観



入口では可愛い看板が出迎えてくれる。  
カフェの名称は賀川が取り組んだ  
食堂「一膳飯天国屋」にちなむ

もともと賀川自身は自分を顕彰するような施設の設立は望んでいないと頑なに主張していた。しかし、顕彰のための建物ではなく、賀川を継承し地域福祉事業や社会福祉事業に取り組むことを目的とした施設であることを知ると賀川は納得し、1963年に「賀川記念館」の名で創設されるに至った。彼は、モノを残すことよりも活動の拠点としてその施設を位置づけたのである。

記念館の福祉事業は地域に住む人たちによって利用され、特に設立当初は、近隣の子どもたちが多く集まり、書道やそろばん、絵画、音楽、野球クラブなど様々な活動を経験することができた。この福祉事業（隣保事業）が始まる以前は、地域のなかで子どもたちが集まったり、こうした活動をしたたりする機会はほとんどなかったようだ。記念館は、人どうしのつながりづくりを支援し、子どもの居場所を提供する貴重な役割を果たしていることがうかがわれる。

一方で、記念館のなかに賀川について人々に知ってもらうための施設は長い間存在しておらず、関連資料が6畳の部屋に保存されているだけであった。そこで、従来の福祉事業に加え、賀川の顕彰施設も創設

することになり、4階を増設し、2010年にミュージアムとしてオープンし現在に至っている。

ミュージアムには、賀川に興味を持つ様々な立場の人々が訪れる。大学生や研究者、協同組合や労働組合関係者はもちろんのこと、賀川を知って関心を抱いた一般の子どもたちが親を連れて訪れることもある。また、キリスト教徒でその布教に尽力した賀川には教会関係者が関心を寄せてやってきたり、親族が賀川とともに活動していたという者がその記録を求めて訪ねてきたりすることもあるという。

## 小学校の副読本に掲載されるまで

冒頭で述べた通り、2020年以降、神戸市における小学校の社会科副読本に賀川豊彦の活動が詳細に掲載されるようになったのだが、この画期的な出来事は、記念館関係者の地道な活動や賀川の実践に再注目が集まっている社会状況、古くから生協活動が盛んな神戸の地域性などの要因が重なって実現したことなのだろうと推測される。

賀川が神戸で慈善活動に従事し始めた時期からちょうど100年を迎える2009年以降、様々な記念事業が行われてきた。その一環として、リニューアルした記念館を地域の人々、特に子どもたちに知ってもらおうと、2009年に記念館に赴任した西氏は、神戸市の教育委員会に対して、賀川を授業のなかで取り上げるようなカリキュラム編成を要望した。この提案は受け入れられることはなかったが、直接個別の小学校とやりとりすることは問題なかったため、西氏は複数の小学校に対して、子どもたちが記念館を訪れ、賀川について知る機会を設けてほしいと要望した。その結果、一部の小

学校の生徒たちが実際に記念館にやってきたそうだ。

その後 2017 年に、賀川が小学校の副読本に掲載される見通しが明らかになった。西氏は副読本に掲載される内容をチェックする監修として関わり、教材に使用する写真もすべて記念館が提供した。西氏が当初より望んでいた、カリキュラムのなかに賀川を学ぶ機会を組み込むことが遂に実現したのである。

特に神戸市はコープこうべの影響力が大きく、総代会には知事や市長などの政治家も参加するほど、政治の側からの信頼も高い。行政とは災害時の物資供給の契約もしており、市民生活を守る非常に重要な存在だと認識されていることがわかる。こうした神戸の地域性が副読本掲載の背景にあった可能性は高いだろう。

## 掲載内容

では、副読本には賀川豊彦が具体的にどのような形で取り上げられているのだろうか。著作権の関係上、該当部分の写真を掲載することはできないが、記載内容を紹介しながら、賀川の生き様を振り返ってみよう。

賀川が登場する副読本は、神戸市の小学校 4 年生向けの社会科の授業で使用する教材である。健康や仕事、自然、災害などのテーマをおもに兵庫県との関わりで扱っており、地域について学ぶことのできる内容構成である。そして、伝統文化や先人に学ぶという項目において、兵庫や神戸にゆかりのある人物、例えば、手塚治虫や嘉納治五郎らが紹介されており、そのなかの一人として賀川が取り上げられている。実に 12 ページにもわたって賀川の生涯や功績

がつつられている。副読本全体の 1 割を占め、授業時間にして 8 コマほどが使われているのである。

賀川のページは、「共に生きる社会 (賀川豊彦)」というタイトルで始まり、まずその人物像について、関東大震災によって被災した人々を助けるために震災が起こった翌日に東京へ向かったというエピソードの詳細とともに述べられている。続いて、賀川の生い立ちが年表で記されている。小学生時代に、働く必要のあった同級生が学校に行くことができないでいた状況をおかしいと感じたり、日露戦争時に戦争反対を訴えたりしたことなどのエピソードが掲載されており、今の私たちにとっても重要な視点ばかりである。現在の児童労働やヤングケアラー、戦争の問題に通じる事柄を 100 年以上も前に賀川は問題視していたと捉えることもできよう。

また、副読本のなかでは、賀川が被災したり困窮したりした人々のために尽力できた理由について、命が何より大切であると説くキリスト教思想が大きく影響していたと言及している。西氏も、賀川の行動力の源には神の存在があったと指摘する。幼少期に両親が亡くなり、引き取られた親族からは冷遇され、病気になって生死をさまよう経験をするなど、とにかく地獄のような生活を送ってきたにもかかわらず、人々のために身を粉にして働くことができたという事実は、いかに宗教を含め信じる力が人間を強くするのかということを教えてくれる。

さらに、賀川の具体的な取り組み事例についても詳細に紹介されている。安い食事を提供する食堂、古着を販売するバザー、困窮した病人を治療するための無料の診療所、学校に行けない子どもたち向けの林間学校などである。また、購買組合 (生協)

創設の取り組みは2ページ以上にわたって詳述されており、購買組合創設に至る当時の社会背景から組織のしくみまでわかりやすく学ぶことができる内容である。



毎年、記念館主催のバザーが開催されている

賀川の思想と実践は国内外に広がっており、国内では総理大臣候補となり、世界では幾度となくノーベル文学賞や平和賞候補となったほど評価されていたことが記されている。ただ、西氏によれば、賀川本人は総理大臣就任の依頼を断ったそうで、政治家ではなく、あくまで現場での取り組みに従事することを通して社会を変えていきたいと考えていた。もっとも、政治が果たす役割の大きさも認識しており、政党の結成に携わり、多くの著名な政治家を誕生させている。

最後の2ページには、現在において賀川がの精神が継承されている実践として、記念館とコープこうべが紹介されている。記念

館が地域福祉に貢献していることや、コープこうべが環境問題や被災地支援に積極的に取り組んできたことが説明されており、先人の血のにじむような努力のうえに現在の私たちの生活を支える助け合いがあることを実感できるようなまとめ方がなされている。

以上が副読本の該当部分の概略である。小学生が理解できるようなわかりやすい説明だが、賀川豊彦という人物のエッセンスが余すところなくまとめられており、実に充実した内容である。記念館関係者や教員ら副読本執筆に携わった人々の力の入れ具合が伝わってくる。

## 副読本掲載の反響

賀川豊彦について授業で学んだ子どもたちはどのような反応を示しているのだろうか。実は、その反響は記念館関係者の予想を上回る大きなものだった。子どもたちは賀川や協同について関心を持ち、親子で記念館を訪れるようになったという。親世代は子どもを通じて賀川を知ったという場合が多く、副読本掲載の思わぬ良い効果が生まれていた。

また、小学生たちの思いを直接知ることのできるものがある。記念館を訪れた小学生らに賀川について学んだ感想を書いてもらったのである。優秀な作文には賞まで授与された。作文の内容は、小学生たちが賀川の思想と実践に高い関心を持ち、自分の頭できちんと考えている様子が伝わるものである。自らの言葉でしっかりと紡がれた文章からは、生徒たちが学びのなかで様々な疑問を抱き、大事な教訓を自分なりに見出していることが想像される。

ここまで子どもたちの心を捉えた要因に

は何があるのだろうか。様々な事柄が考えられるだろうが、今回の取材を通して筆者が感じたことは、昨今のSDGsのような社会問題に意識を向け、社会改善を目指して行動していこうとする風潮が教育に浸透し、子どもたちにとっても当たり前になりつつあることである。「SDGsの先駆者」ともいえる賀川の実践は、特に現在の状況になじむものといえよう。

副読本の記述も、賀川の活動を正確に伝えるものであると同時に、現代社会とのつながりを意識して書かれている。偉人伝にありがちな、成し遂げたことの華やかな側面を描くというよりもむしろ、後世に残る様々な活動の裏にあった相当な苦労や困難がありのままに述べられている。無料で物資を供給することに疑いの目を向けられたり、食堂で無銭飲食をされたり、病気の人が減らなかつたりといった、実践過程での苦労が明記されている。こうした困難を伴う先駆的な取り組みが、現在の私たちの生活を支える生協や社会課題解決のための様々な実践につながっているのだと理解できるような構成であるため、子どもたちの心にも身近なこととして響いたのかもしれない。

## おわりに

協同組合が誕生した19世紀のイギリスでは、生協が子どもたちに対して協同組合に親しむことのできる機会を積極的に提供していた。このことが示すように、社会における助け合いの精神を醸成していくためには、早い段階で協同の考えを当たり前のもthingとすることが肝要である。今回の副読本への掲載はまさにその考え方を形にしたものといえるだろう。

神戸市の小学校は実にユニークなカリキュラムを提供しており、今回の副読本の内容が地域を学ぶ構成になっているように、地域の社会・経済・文化を教えることに力を入れている。また、地域の様々な職業のなかから1週間もの期間、実際に体験することができるカリキュラムもあるそうだ。もちろんそのなかには生協も含まれる。地域を大事にする教育方針が、今回の副読本掲載につながったのだろう。

新自由主義の風潮が高まる1970年代以降、現在に至るまで大学における協同組合関連の授業は世界的に減少傾向にあり、教育のなかでの協同組合の存在感は低下している。そうした状況下で、賀川が授業で扱われるようになったことは画期的であり、これをきっかけに、全国の小学校にも広がっていくことを期待したい。

賀川は弱者救済に献身したうえに、生涯に400冊近くの本を執筆する、作家としても名をはせた。子どもたちも先の作文で書いていたことだが、まさに超人であり、真似できることではない。しかし、彼が数々の著作と実践によって伝えようとした精神は、私たち誰もが日々の生活のなかで実践することができる。賀川について学んだ多くの子どもたちが、そのことを理解し、行動につなげていってくれることを願う。

東京の世田谷区にある、賀川関連の資料を所蔵する松沢資料館が、SDGsの17項目の内容と賀川の実践を対応させてみるユニークなクリアファイルを作成している。これはまさに現在地球規模で進行する様々な課題のほとんどは賀川によって先駆的に取り組まれてきたということがよくわかる。私たちが新しいとみなしがちな思想や実践のほとんどは過去の積み重ねから出てきたものなのである。

様々な難題が山積する現代においてこ

